

むずかしいことをやさしく

2019. 12. 19

先日、この紙面を借り、3号にわたってアクティブラーニングについて考えた。その後も考えている。ふと、ある言葉を思い出した。

むずかしいことをやさしく
やさしいことをふかく
ふかいことをおもしろく
おもしろいことをまじめに

井上ひさしさんの言葉である。梁川高校の先生方は、「むずかしいことをやさしく」毎時間、生徒にわかってもらおうと努力している。きっと、うまくいかないことの方が多くことだろう。もしかしたら、授業後に敗北感を味わっているかもしれない。どうしたら、もっとわかってもらえるだろうと悩んだり、いろいろなことを試したりしていることと思う。むずかしいことをむずかしく言うのは簡単である。だが、むずかしいことをやさしく相手に伝えるのは容易なことではない。相手ができるように“翻訳”してあげなければならない。相手に合わせて“カスタマイズ”しなければならない。

池上彰さんという方がいる。有名な方なのでみなさんご存じのことと思う。テレビを見ていると、池上さんの解説はわかりやすい。なぜなのだろうか。何かコツはあるのだろうか。私は、政治、経済、宗教など世界情勢について勉強したいときに、池上さんの本を読むことがある。わかりやすく、一気に読めてしまう。最近では、『おとなの教養』と『おとなの教養2』の2冊を読んだ。池上さんは、毎日14紙の新聞に目を通していているそうである。朝は、ざっと目を通し、夜にじっくりと読む。気になる記事は切り取ってまとめておく。保存しておきたいものは、ジャンル分けしたクリアファイルに入れていく。新聞を読んでわからない、知りたいことがあったら、書店に足を運んで本を買って読むのだそうである。

むずかしいことをやさしく教えるために必要なことは、まずは専門性だと思う。高校の先生には専門性が求められる。進学校の生徒を教えるためには、もちろん専門性が必要だが、梁川高校の生徒に教えるためには、それ以上の専門性が必要だと思う。本当にわかっていなければやさしくかみ砕いて教えることはできない。

梁川高校の先生方の中には、進学校で教鞭を執りたいと考えている教員もいる。それはおかしいことではない。私はその先生に言ったことがある。「あなたがもし優秀な教員であれば、進学校で教えられるかもしれないが、梁川高校でも教えることができるはずだ」この言葉の裏には、「まずはこの梁川高校でああなたの専門性の高さを見せてくれ」という意味が含まれている。

むずかしいことをやさしくできたら、次は、「やさしいことをふかく」したい。ここがアクティブラーニングにつながる部分でもある。むずかしいことがやさしくなり理解できたとする。それだけでも随分と違う。では、やさしいことがふかくなったとしたら、これが本当の“学び”である。学びにはふかさが必要である。このレベルまできてようやく学ぶことがおもしろいと思えるようになる。梁川高校の生徒に、ぜひこの深い学びを実感させたい。学ぶことがおもしろいと思えたら、あとは自分の力で学んでいく。学校教育の中で、何とかここまでもっていきたい。学校という枠組みの中で残された最後のチャンスが、高等学校なのである。